



IFIP 近況報告

～ 情報処理国際連合 ～

中島秀之

情報処理学会 IFIP 委員会委員長
本会副会長

齊藤忠夫

IFIP (GA) 委員会
TC 6 日本代表

はじめに

IFIP の活動を年 1 回のペースで学会誌で会員の皆様にお知らせしている。ご存知のように IFIP は情報処理の国際連盟で、各国 1 組織のみがメンバとなり、日本では情報処理学会がこれに当たる（アメリカのみ例外で IEEE Computer Society と ACM がメンバ）。

全体的な動向に関しては昨年にお知らせしてから大きな変化はないが、IFIP を含むいくつかの組織が情報処理技術者の認定に関心を持って動き出していることに注目しておくべきだろう。IFIP のほかにアメリカとアジアが各々独自に主導権を握ろうとしている。我が情報処理学会においても、楕円の 2 焦点モデルの片翼を担う実務者のための認定試験に対する態度を固めなければならない時期にきている。

IFIP 総会 in エチオピア

IFIP は情報技術の社会的重要性の認識のもとユネスコの活動によって各国で設立された情報処理学会の連盟であり、2010 年で 50 周年となる。日本の情報処理学会もこの国際的な動きを受けて設立されたものであり、学術団体としては特殊な経緯を持つ。情報処理学会の会員の多くは学会を純学術的組織と認識していると思われるが、その母体である IFIP は政治的組織としての性格を色濃く持っている。もちろんコンファレンス等を主催する WG レベルは純学術的であるが、上位に行くほど政治的色彩を帯びることになる。

IFIP の総会 (GA: General Assembly) は 1 年ごとに開催される WCC と WITFOR (World IT Forum) に伴って招集される。WITFOR は主として途上国の開発のための情報技術について各国政府の政策を論ずるものとなっており、近年ではアフリカ諸国で開催されることが多く、

アフリカ諸国の閣僚クラスが多数出席する会合となっている。これにはユネスコの支援とこれに伴う先進国の企業が関連する。アフリカ諸国の一部には政治的に不安定な国もあり、また旅行事情の悪い国もある。2007 年には IFIP-GA はエチオピアのアジスアベバで開催されたが、政治的不安定から日本の外務省は旅行注意地区に指定しており、西アジア、アフリカでの各国旅行者を巻き込んだ事件が多発していることもあり、日本代表は出席を取りやめた。全体としての出席率も低く、出席率は国代表で 54%、TC 代表で 30% であった。

今後 GA は 2008 年ミラノ (イタリア) で WCC と連携開催、2009 年はベトナムで WITFOR 2009 と連携開催される。WCC2010 は IFIP50 周年の記念 WCC であり、これには中国、南アフリカ、オーストラリア、インドからの招請があり、GA での投票の結果オーストラリアのブリスベンで開催されることになった。

IFIP の会長は 2007 年でドイツのブルンシュタインから南アフリカのフォンソルムスに交代する。新会長は選挙演説で南半球の途上国の IT の重要性を主張しており、会員組織の数においても途上国が増加しているため、今後 IFIP の途上国志向は強まると思われる。先進国もアフリカ市場を重視する必要がある、本会としてもこうした傾向に配慮しつつ、産業界と協力して活動する必要がある。

以下に当学会員に特に重要なトピックスについて述べる。

■ IFIP Professional Practice Task Force

情報処理技術者の国際的な流動性のための能力認定は、ヨーロッパにおける労働力の流動化、インド・中国に代表される IT 技術者の国境横断的活用の必要性から求められている。これを支援するため IFIP では 2007 年のカ

ウンシルで I3P (IT Professional Practice Programme) を立ち上げた。タスクフォースは GA において、このプログラムを具体化するための検討を行うことになった。この議論は 2006 年の 8 月にカナダの情報処理学会が中心となり、アメリカ、イギリス、日本、韓国の情報処理学会の代表を集めて予備的な議論があったものである。イギリスでは特に情報処理技術者個人の能力を評価する試験が実施されている。日本では個人の能力の評価は学会外で行われており、学会としてはこれに類する活動はない。この動きも学術団体としての活動外の動きであると思われるが、今後の情報処理技術者の国際的活動、企業の海外の技術者の活用にあたって注目すべき IFIP の活動である。関係者の関心の高まりを期待したい。

■ IFIP Digital Library Selection Task Force

IFIP の会議録はスプリンガーとの契約によって出版され、年間 30 冊前後が出版されている。しかし売上は伸びておらず、1 冊の単価は高価であるため、図書館等でのサーキュレーションは不十分である。学会の価値はそこで発表された論文が読まれ、引用されることにあり、その点に関して IFIP の価値を高めることに困難がある。電子出版を基本とし、無料もしくは低料金でこれにアクセスできるようにすることは長い間 TC 等からの要求が強かった。基本的問題としては IFIP の収入に図書印刷税が無視できないこともある。単にデジタルライブラリを作ることは比較的容易であるが、これを長期的安定に保つことのできる組織を求めることも重要である。

この問題についてデジタルライブラリ作業グループの報告が行われ、オーストラリア情報処理学会 (ACS: Australian Computer Society) から年間 3 万ユーロでデジタルライブラリサービスを開始することを申し出があったことが報告され、GA は具体化を検討することを認めた。永年の懸案であった論文の電子アクセスがこれによって一歩前進した。スプリンガーとの契約は 2010 年で切れるが、スプリンガーとの契約をどうするか決定は 2008 年の GA で行われる。

TC 1 (Foundations of Computer Science)

日本代表：伊藤貴康 (東北大学)

TC 1 の Chair は 2006 年 1 月以来 Mike Hinchey [US] である。

TC 1 会議が 2007 年 3 月 25 日にポルトガルの Braga にある Minho 大学で開催された。出席者は 11 名 (含、オブザーバ 1 名) であった (日本からの出席者はなし)。

(1) 3 名の新メンバ (Xiaotie Deng [HK], Vangelis [FR], Vladimiro Sassone [UK]) の紹介。

ほかに、Connie Heitmeyer [US], Catuscia Palami-

dessi [FR], Jim Woodcock [UK] が新メンバとなる (ただし、欠席)。

(2) WG 1.2 on Descriptive Complexity, WG 1.3 on System Specification, WG 1.7 on Formal Security, WG 1.8 on Concurrency Theory からの報告。

(3) TCS2008 は WCC2008 (Milan, Italy) のサブ会議として開催し、従来通り Track-A と Track-B を編成することになった。Steering Committee Chair は Mike Hinchey でメンバに (東北大学教授) 小林直樹が入っている。

Track-A : Complexity, Formal Languages, Algorithms Track-B : Logics and Semantics

(4) Mini Colloquium

2002 年以來 TC 1 会議の際に開催されることになっている TCS Colloquium が開催された。講演者は、Jozef Gruska, Xiaotie Deng, Vladimiro Sassone の 3 名であった。

(5) TC 1 が協賛する会議 : ICGT2007, TASE2007, CALCO2007, LATIN2008.

TC 2 (Software : Theory and Practice)

日本代表：萩谷昌己 (東京大学)

TC 2 の会合は、年 1 回、主として管理運営を目的として開かれる。今年は、6 月 17 ~ 18 日にブルガリアのソフィアで開催された。日本代表は前任の笈捷彦氏から萩谷に交代したのであるが、交代の際の事務手続き上の手違いがあり萩谷に会合の案内が送られて来なかったため、残念ながらソフィアの会合に出席できなかった。議事録に基づいて報告する。

昨年に新設された WG 2.13 (Open Source Semantics) を含めて TC 2 下の WG 2.1 ~ WG 2.13 は、それぞれの会合を持つほか、さまざまな国際会議・セミナーを開催している (IFIP TC 2 Web ページ参照 <http://www.ifiptc2.org/>)。TC 2 が若手研究者を表彰するために設けている Manfred Paul 賞は、この賞の趣旨から、IFIP が主催・共催・後援する国際会議での最優秀論文の発表者に贈られる。2006 年は、RE'06 (14th IEEE International Requirements Engineering Conference, Minneapolis) が対象の国際会議であった。賞は次の論文の発表者に与えられた。

Jane Cleland-Huang, Raffaella Settini, Xuchang Zou, and Peter Solc "The Detection and Classification of Non-Functional Requirements with Application to Early Aspects"

なお、2007 年の対象国際会議は SEE-SET (2nd IFIP Central and East European Conference on Software Engineering Techniques) である。2008 年はアジアもし

くはアメリカの会議が対象とされ、APLASなども候補としてあがっている。

昨年の報告にもあるが、従来からWGのメンバになっている情報処理学会会員がそれぞれにWGの会合に参加して活動をしているものの、研究会などとの直接的な関連がついていない。その中で、WG 2.1 (Algorithmic Languages and Calculi) の会合が9月10～14日に京都で開催された。また、WG 2.5 (Numerical Software) に新たに宇都宮大学の川田重夫氏がメンバとして加わった。しかし、WG 2.3やWG 2.4のように、日本からのメンバが一人もいないWGもあり、情報処理学会との関係をどのように進展させるかは課題としてあり続けている。

次回の会合はWorld Computer Congressと合わせて開かれる予定。

TC 5 (Information Technology Applications)

日本代表：木村文彦 (東京大学)

TC5は、Computer Applications in TechnologyからInformation Technology Applicationsにその名を改め、情報技術の応用を支援するための基本的な概念やモデル、理論に関する研究開発の振興を目指すこととされた。従来は、Manufacturing Automation, Computer Aided Engineering, Management Information Systemsなどの産業応用に関する技術課題を追求してきたが、その活動内容が拡大し拡散してきた。産業・社会における情報処理技術を広く対象として、新分野開拓、産学連携を旗印に活動を再編成、活性化しようとしている。2007年のTC5会議は9月にポルトガルのGuimaraesで行われた。不活発なWGの整理が行われ、現状のWGは以下のようにになっている：WG 5.1 (Information Technology in the Product Realization Process), WG 5.4 (Computer-Aided Innovation), WG 5.5 (Cooperation Infrastructure for Virtual Enterprises and Electronic Business), WG 5.7 (Integration in Production Management), WG 5.10 (Computer Graphics and Virtual Worlds), WG 5.11 (Computers and Environment), WG 5.12 (Architecture for Enterprise Integration)。また、新たにSIG on Enterprise Interoperabilityが活動を始め、WGとなる予定である。WGの構成から見られるように活動内容がやや混乱しており、またSIG on e-Governanceの提案がなされるなど、他TCの活動領域との干渉も懸念され、TC5のコアとなるべき活動領域について議論が続いている。

TC 6 (Communication Systems)

日本代表：齊藤忠夫 (トヨタ IT 開発センター)

TC6は毎年2回のTC会合を開催する。TC6の下には10のWGがあり、開催されるワークショップ、コンファレンスは例年30件前後である。本年は28件の開催があった。TC6は通信システムをテーマとしているが、情報技術の中での通信の役割は広がっており、TC6の開催する会議は増加傾向を続けている。TC6の内部でも無線通信を主務とするWG 6.8の関連する会議は増加している。WG 6.8が関与しないが、無線通信を含む会議も増えている。一方技術の変化に伴うWGの改組もそれぞれの会議の継続性も含めて多くの議論があり、時間をかけて進められている。

TC6のメンバ国で代表を送っている国は約50カ国であり、それにWGの議長を加えて、約60名のTC委員となっている。TC会合はヨーロッパで開催されることが多く、代表を送っている国はヨーロッパに多いので、その場合には出席率は高くなるが、ヨーロッパ以外での開催では出席率は低下する。2007年の第1回は5月にアメリカのアトランタで開催され、出席者は国代表7、WG代表4にとどまった。第2回はブルガリアのボロベツで開催され国代表18、WG代表9が出席した。日本代表は2007年は第1回のみ出席したが、その他2007年中にはWG 6.8、WG 6.11のWG会合に出席し、また3回のコンファレンスに出席した。アジア各国の代表の出席が全般に悪いことに対して改善の働きかけは行われているが、例年ほぼ常時出席しているのはアジアからは日本代表のみとなっている。しかしアメリカで開催された場合にヨーロッパからの出席が悪いことを考えれば、この種の会議を世界的な出席者を得て開催することの困難が分かる。

2008年にはTC6関連で、次の3会議が日本で開催される。

- FORTE2008: 28th IFIP WG 6.1 International Conference on Formal Methods for Networked and Distributed System : 6月10～13日
<http://www.higashi.ist.osaka-u.ac.jp/FORTE08/>
- Testcom2008: 20th IFIP International Conference on Testing Communication Systems : 6月10～17日
詳細は同上
- I3E2008: 8th IFIP Conference on E-Business, E-Services and E-Society : 9月24～26日
<http://www.i3e2008.org/>

TC 7 (System Modeling and Optimization)

日本代表：亀田壽夫（筑波大学）

TC 7 Conference および TC 7 meeting は隔年に開催され、今年はその開催年にあたり、第 23 回の TC 7 Conference が、2007 年 7 月に、ポーランドの Cracow で開催された。その運営に関して、PC メンバの間で email によって、かなりの議論が行われた。

近年の方針どおり、今回もミニシンポジウムをかなりたくさん集め（16 セッション）会議の重点とした。その他 12 の一般セッションがあった。主にミニシンポジウムと組み合わせて、plenary speaker 11 名の発表があった。280 の論文の申込みがあり、plenary talk を含め 232 件の発表があった。参加者は、33 カ国からの 250 名で、ポーランド、ドイツ、合衆国からの参加が多かった。次回第 24 回 2009 TC 7 Conference は、アルゼンチンの Buenos Aires で開催の予定。

傘下の WG については、TC 7 委員会は、その設立・改廃の際にかかわるのみであり、各 WG はほぼ独立に各々の活動を続けている。会議期間中に行われる TC 7 meeting において各 WG の活動の報告が行われるが、TC 7 conference や委員会へのかかわりに対する積極さにも、依然として違いがある。

TC 8 (Information Systems)

日本代表：内木哲也（埼玉大学）

TC 8 は情報システム (Information Systems) の計画、分析、設計、利用、評価、マネジメントなどの活動を対象としている。本年は 6 月 18 ~ 19 日に英国 London にある BCS (British Computer Society: 英国コンピュータ学会) において 18 カ国の代表委員と WG 代表者の 21 名により TC8 年次総会が開催された。今回の会議では、TC 8 が IFIP に預託してきた活動収益金を利用した今年度の社会活動と今後の TC8 の活動方策について議論および審議された。

預託金活用方策としては、昨年審議決定された来年の WCC (Milano, Italy) での、TC 8 主催のコンファレンスは、"Advances in Information Systems Research, Education, and Practice" として開催することが企画グループから提案され、了承された。また、開発途上国に対する技術開発および教育研究支援のあり方についても種々議論がなされたが、統一的な結論には至らず引き続き同グループにおいて検討を続けることが了承された。

なお、Chair の改選に伴い、Second Vice-Chair の Barbara Pernici (Italy NR, WG 8.1-Chair) が選出された。それに伴い、George Kasper (USA-ACM NR) が Second Vice-Chair に推薦され、全会一致で承認された。

来年は WCC の開催に合わせて 9 月 5 ~ 6 日にイタリアの Milano 近郊 Como で開催される予定である。

TC 9 (Relationship between Computers and Society)

日本代表：松本恒雄（一橋大学）

TC 9 (Relationship between Computers and Society) の 2007 年度の総会は、2007 年 9 月 28 ~ 29 日に、イギリスのロンドン・スクール・オブ・エコノミクス (LSE) で開催された。総会にあわせて、29 日の午前中には、"ICT uses in warfare and the safeguarding of peace" (戦争と平和における ICT 利用) と題したワークショップが開催された。

TC 9 には、WG 9.1 "Computers and Work", WG 9.2 "Social Accountability", WG 9.3 "Home Oriented Informatics and Telematics", WG 9.4 "Social Impact of Computers in Developing Countries", WG 9.5 "Social Implications of Artificial Intelligence Systems", WG 9.6 "IT Misuse and the Law", WG 9.7 "History of Computing", WG 9.8 "Women and IT", WG 9.9 "ICT and Sustainable Development" がある。これらのうち、WG 9.8 の活動が停滞している。

WG 9.1 は、2007 年 6 月 6 日にスイスのザンクト・ガレンで再開ワークショップを開催し、新役員を選出するとともに、Web サイトを開設した (<http://jpedia.org/ifipwg91>)。WG 9.4 は <http://is.lse.ac.uk/ifilwg94/> に、WG 9.7 も <http://CompHist.org> に Web サイトを有している。

WG 9.2, WG 9.6, WG 11.7 は 2007 年 8 月 6 ~ 10 日にかけて、第 3 回サマースクール "The Future of Identity in the Information Society" をスエーデンのカールスタット大学で共催した (<http://www.cs.kau.se/IFIP-summerschool/program.html>)。

SIG 9.2.2 は Computer Ethics について、WG 9.9 は Sustainable Information Society について、それぞれ Wikipedia の項目を執筆した。

TC 10 (Computer Systems Technology)

日本代表：南谷 崇（東京大学）

TC 10 はコンピュータシステムの各階層における設計・評価技術とその概念、方法論、ツールに関する情報交換と協調促進を目的としている。2002 年から 2 期 6 年務めた現執行部、Chair: Franz Ramming (ドイツ代表)、Vice-Chair: Daniel Etiemble (IEEE CS 代表)、Vice-Chair: Takashi Nanya (日本代表)、Secretary: Bernhard Eschermann (スイス代表) の任期は 2007 年末で終了し、2008 年からは Bernhard Eschermann (ス

イス代表)がChairを務める。現在活動しているWGは、"10.1: Computer-aided Systems Theory", "10.2: Embedded Systems", "10.3: Concurrent Systems", "10.4: Dependable Computing and Fault Tolerance", "10.5: Design and Engineering of Electronic Systems"の5つである。10.1は休眠状態であるが、他の4つは非常に活発で、それぞれいくつかのWG主催のシリーズ・コンファレンスを開催し、多数の共催行事を実施している。2007年度のTC Meetingは4月フランス・ニースでのDATE2007の会期中に開催された。2008年度のTC meetingはイタリア、ミラノでのWCC2008に同期して9月に開催するTC10主催のBICC2008 (Biologically Inspired Cooperative Computing)の会期中に開催される予定である。

TC 11 (Security and Protection in Information Processing Systems)

日本代表：村山優子 (岩手県立大学)

TC 11は情報セキュリティに関連する分野を取り扱うTCである。TC 11の年次会議は、TC 11主催のSEC (International Information Security Conference)の前日に毎年開催される。今年度は、南アフリカ共和国のヨハネスブルグ郊外のサントンにて開催された第22回となるSEC2007の開催前5月13日に行われた。今回は長年委員長を務めたLeon Strous氏の後任として、それまで副委員長を務められたKai Rannenberg教授が選出された。その後、副委員長には、南アフリカ共和国のRossouw von Solms教授が指名された。Leon Strous氏は、現在、IFIPのVice-presidentである。

会議後開催されたSEC2007は、全体で128名の参加者があり、うち51名は南アフリカから、17名はドイツから、10名は英国からであった。米国からの参加者も数名いたほか、アジアからは少なかった。日本からは私が1名参加した。基調講演は、現在、セキュリティ分野で注目を集めるセキュリティのヒューマンファクタを扱う新分野「セキュリティ心理学」についてケンブリッジ大学のRoss Anderson教授が紹介した。SECは例年5月に開催されるが、来年は、イタリアのミラノで開催されるWCC2008 (IFIP World Computer Congress)の一部として9月に開催予定である。また、SEC2009はキプロスのニコシアで開催予定と決まった。

昨年度、新たなWGが3つ設立され、活動が進む一方、今回は、IntegrityとInternalControlに関するWG 11.5が廃止された。また、TC 11の今年度の会議で新たに承認されていたWG 11.12 (プライバシー関連)は9月始めに行われたTA (Technical Assembly)にて、WG 9と内容が一部重複するので、承認を見送られた。今後、WG

間の調整が必要となる。

各WGがさまざまな会議を開催している中、昨年設立されたデジタルフォレンジックスのWG 11.9が2008年1月に、前TC 11日本代表の佐々木良一東京電機大学教授がGCとなり京都で開催される。デジタルデータの証拠性等を取り扱う本WGはElsvierで論文誌を発行するなど、活発な活動を行っている。

TC 12 (Artificial Intelligence)

日本代表：西田豊明 (京都大学)

TC 12のメンバは、2007年4月13日現在では、アルゼンチン、オーストリア、オーストラリア、ベルギー、ブルガリア、チリ、中国、チェコ、ドイツ、デンマーク、スペイン、フィンランド、フランス、ギリシャ、クロアチア、ハンガリー、インド、イタリア、日本、リトアニア、オランダ、ノルウェー、ニュージーランド、ポルトガル、セルビア、スウェーデン、スロベニア、スロバキア、英国の各国代表、IAPR, IJCAI, IEEE CS, ACM, CLEI (Centro Latinoamericano De Estudios Informatica)の機関代表、およびTC, WG代表数名からなる。

TC 12には、WG 12.1 (Knowledge Representation and Reasoning), WG 12.2 (Machine Learning and Data Mining), WG 12.3 (Intelligent Agents), WG 12.4 (Semantic Web, WG 2.12とジョイント), WG 12.5 (Artificial Intelligence Applications), WG 12.6 (Knowledge Management), WG 12.7 (Computer Vision)の7つがある。定期的で開催しているイベントとして、TC 12/WG 12.5 Applications and Innovations in Artificial Intelligence (AIAI, 2004から毎年開催), TC 12/WG 12.2 IFIP International Conference on Intelligent Information Processing (ICIIP, 2000年から隔年開催), TC 12 Technical Conference (IFIP AI 20xx, IFIP WCCに合わせて各年開催, Professional Practice in AI シンポジウムを併設), WG 2.12/12.4 International Workshop in Semantic Web and Web Semantics (SWWS)の4つがある。このほかに、AI Winter Schoolが計画されている。また、議長のMax Bramer教授 (ポーツマス大学)主導でIFIPにおける人工知能への取り組みのポジションを示す書籍を刊行する準備が進められ、10件のポジションペーパーが提案されている。WG 12.2, 12.4, 12.5以外からは年次報告が出ていない。

TC 14 (Entertainment Computing)

日本代表：中津良平 (関西学院大学)

TC 14 (Technical Committee on Entertainment Computing)は、2002年8月モンテリオールにおけるIFIP総会において設立が認められたSG 16 (Specialist Group

on Entertainment Computing, 議長：中津) がその母体である。これ以降、国際会の開催、関連の国際会議の開催、WGの活動に重点を置いてその活動を活発化してきた。その活動が認められ、設立後4年が経過した2006年8月にチリ、サンチャゴで行われたIFIP総会において、TCへの昇格が認められ、TC14として活動を開始することとなった。また、SG16に引き続きTC14においても中津が議長を務めている。昨年1年間の主たる活動は以下の通りである。

(1) 新たに以下の2つのWGを設置し、その活動を開始した。

- WG14.6: Interactive TV, Chair: Lyn Pemberton (Dr., University of Brighton, UK)
- WG14.7: Art and Entertainment, Chair: Naoko Tosa (Prof., Kyoto University, Japan)

(2) TC14のWebサイトを開設し、最新の活動状況等を掲載することとした。

IAPRの活動全般報告 (International Association for Pattern Recognition)

日本代表：田島譲二 (名古屋市立大学)

IAPR (国際パターン認識連盟) は、パターン認識、画像理解、コンピュータビジョンなどの分野における研究活動の活性化と研究交流の促進を目的とした国際組織である。

傘下に、研究分野別に設立された20のTechnical Committee (TC) があり、研究活動を支援・推進している。IAPRのカバーする分野の研究は、近年ますます盛んになっており、それに伴ってTCも増加している。2006年10月から2007年9月にIAPRがSponsorとなって開催された国際会議は21を数えた。5月に東京で、筆者がGeneral Chairとして開催したIAPR Conference on Machine Vision Applications (MVA2007)もその1つであった。この会議は、IAPR TC-8, MVA Conference

Committee および東京大学生産技術研究所とで共催された。

IAPRの最も重要な会議はICPR (パターン認識国際会議) であり、第19回目の会議が来年12月に米国フロリダのTampaで開催される予定である。日本からは、江尻正員氏 (元日立) が3名のGeneral Chairの1人として運営に参加している。

東南アジアコンピュータ連合 (略称 SEARCC; South East Asia Regional Computer Confederation)

日本代表：三上喜貴 (長岡技術科学大学)

東南アジアコンピュータ連合 (略称 SEARCC; South East Asia Regional Computer Confederation) はアジア太平洋地域における情報処理関係学協会の地域的連合体であり、IFIPのAffiliate Membersの1つである。現在、オーストラリア、香港、インド、日本、マレーシア、ニュージーランド、パキスタン、スリランカ、台湾、タイを代表する10学会が加盟している。1978年の設立時点において東南アジア6カ国を中心に組織されたためにこの名称があり、今も用いられているが、実際の地理的範囲は東南アジアの範囲を超え、南アジア、太平洋地域、東アジアに及んでいる。SEARCCの主な活動は、年に1回開催される総会を中心に、理事会、SIG活動、マイクロマウス競技会、ソフトウェア競技会などである。日本からは、当初(財)国際情報化協力センター (CICC) がオブザーバとして参加していたが、1999年から情報処理学会が正会員となっている。2001年以降会員間の意見対立等により数年間にわたり活動は停滞していたが、2007年11月にはバンコクで年次総会、ソフトウェア協議会が開催されるなど、アジア太平洋地域における情報処理分野のプロフェッショナルソサエティとしての新しい役割を模索しつつ活動を再開している。

(平成19年11月15日受付)

■ IFIPのTC, SGとWG一覧

TC1 : Foundations of Computer Science

WG 1.1 Continuous Algorithms and Complexity
WG 1.2 Descriptive Complexity
WG 1.3 Foundations of System Specification
WG 1.4 Computational Learning Theory
WG 1.6 Term Rewriting
WG 1.7 Theoretical Foundations of Security Analysis and Design
WG 1.8 Concurrency Theory

TC 2 : Software : Theory and Practice

WG 2.1 Algorithmic Languages and Calculi
WG 2.2 Formal Description of Programming Concepts
WG 2.3 Programming Methodology
WG 2.4 Software Implementation Technology
WG 2.5 Numerical Software
WG 2.6 Database
WG 2.7 (=WG 13.4) User Interface Engineering
WG 2.8 Functional Programming
WG 2.9 Software Requirements Engineering
WG 2.10 Software Architecture
WG 2.11 Program Generation
WG 2.12 (=WG 12.4) Web Semantics
WG 2.13 Open Source Semantics

TC 3 : Education

WG 3.1 Informatics and ICT in Secondary Education
WG 3.2 Informatics and ICT in Higher Education
WG 3.3 Research on Education Applications of Information Technologies
WG 3.4 IT-Professional and Vocational Education in Information Technology
WG 3.5 Information and Communication Technologies in Elementary Education
WG 3.6 Distance Learning
WG 3.7 Information Technology in Educational Management
SIG 3.8 Lifelong Learning

TC 5 : Information Technology Applications

WG 5.1 Information Technology in the Product Realization Process
WG 5.4 Computer Aided Innovation
WG 5.5 Co-operation Infrastructure for Virtual Enterprises and Electronic business (COVE)
WG 5.7 Integration in Production Management
WG 5.10 Computer Graphics and Virtual Worlds
WG 5.11 Computers and Environment
WG 5.12 Architectures for Enterprise Integration
SIG Enterprise Interoperability

TC 6 : Communication Systems

WG 6.1 Architectures and Protocols for Distributed Systems
WG 6.2 Network and Internetwork Architectures
WG 6.3 Performance of Communication Systems
WG 6.4 Internet Applications Engineering
WG 6.6 Management of Networks and Distributed Systems
WG 6.7 Smart Networks
WG 6.8 Mobile and Wireless Communications
WG 6.9 Communication Systems in Developing Countries
WG 6.10 Photonic Networking
WG 6.11 Electronic Commerce-Communication Systems

TC 7 : System Modeling and Optimization

WG 7.1 Modelling and Simulation
WG 7.2 Computational Techniques in Distributed Systems
WG 7.3 Computer System Modelling
WG 7.4 Discrete Optimization
WG 7.5 Reliability and Optimization of Structural Systems
WG 7.6 Optimization-Based Computer-Aided Modelling and Design
WG 7.7 Stochastic Optimization

TC 8 : Information Systems

WG 8.1 Design and Evaluation of Information Systems
WG 8.2 Interaction of Information Systems and the Organization
WG 8.3 Decision Support Systems
WG 8.4 E-Business Information Systems: Multi-disciplinary research and practice
WG 8.5 Information Systems in Public Administration
WG 8.6 Diffusion, Transfer and Implementation of Information Technology
WG 8.8 Smart Cards, Technologies, Applications & Methods
WG 8.9 Enterprise Information Systems

TC 9 : Relationship between Computers and Society

WG 9.1 Computers and Work
WG 9.2 Social Accountability
WG 9.3 Home Oriented Informatics and Telematics - HOIT
WG 9.4 Social Implications of Computers in Developing Countries
WG 9.5 Social Implications of Artificial Intelligence Systems
WG 9.6 (=WG 11.7) Information Technology : Misuse and The Law
WG 9.7 History of Computing
WG 9.8 Women and Information Technology
WG 9.9 ICT and Sustainable Development

TC 10 : Computer Systems Technology

WG 10.2 Embedded Systems
WG 10.3 Concurrent Systems
WG 10.4 Dependable Computing and Fault Tolerance
WG 10.5 Design and Engineering of Electronic Systems

TC 11 : Security and Protection in Information Processing Systems

WG 11.1 Security Management
WG 11.2 Small System Security
WG 11.3 Data and Application Security
WG 11.4 Network Security
WG 11.6 Identity Management
WG 11.7 (=WG 9.6) Information Technology : Misuse and The Law
WG 11.8 Information Security Education
WG 11.9 Digital Forensics
WG 11.10 Critical Infrastructure Protection
WG 11.11 Trust Management

TC 12 : Artificial Intelligence

WG 12.1 Knowledge Representation and Reasoning
WG 12.2 Machine Learning and Data Mining
WG 12.3 Intelligent Agents
WG 12.4 (=WG 2.12) Semantic Web
WG 12.5 Artificial Intelligence Applications
WG 12.6 Knowledge Management
WG 12.7 Computer Vision

TC 13 : Human-Computer Interaction

WG 13.1 Education in HCI and HCI Curriculum
WG 13.2 Methodology for User Centred System Design
WG 13.3 Human-Computer Interaction and Disability
WG 13.4 (=WG 2.7) User Interface Engineering
WG 13.5 Human Error, Safety and System Development
WG 13.6 Human-Work Interaction Design group

TC 14 : Entertainment Computing

WG 14.1 Digital Storytelling
WG 14.2 Entertainment Robot
WG 14.3 Theoretical Foundation of Entertainment Computing
WG 14.4 Games and Entertainment Computing
WG 14.5 Social and Ethical Issues
WG 14.6 Interactive TeleVision
WG 14.7 Art and Entertainment